

平成27年度 長良川河口堰定期報告 レビュー(1/2)

項目	これまでの委員会での評価と今回の委員会での評価
治水	・しゅんせつは、出水時の水位低下、高い水位での継続時間の短縮、水防活動の労力軽減の<u>効果を発現</u>している。
利水	・河口堰による新規利水は安定して供給され<u>効果を発現</u>している。 ・既存用水の常時取水の安定化に<u>効果を発揮</u>している。
地下水の塩化物イオン濃度	【目的】 河口堰の運用にともない輪中内の浅層地下水の塩化物イオン濃度の把握する。 ・塩化物イオン濃度に変化がない、もしくは、減少傾向にあった観測地点については、平成16年度までに段階的に観測を終了し、高須輪中No.18付近のみ観測を継続する。 ・高須輪中No.18付近の<u>塩化物イオン濃度の高い領域は、平成16年度以降減少傾向にあるが、その領域の移動状況については、引き続き監視の継続が必要である。</u>
地下水位 (河口堰の運用による堤内地および堤防への影響)	【目的】 河口堰の運用にともない、浸透水対策(堤内地の湿潤化の防止、堤防の安定の確保)として実施されたブランケット、承水路、堤脚水路等の効果を把握する。 ・浅層地下水位、水路水位、浸透水量については、概ね一定の値で推移しており、浸透水対策の効果が確認でき、浅層地下水位等の観測は平成11年度までに終了した。 ・現在は通常の河川管理業務の中で実施している4地点の深層地下水位観測に移行した。 ・輪中の深層地下水位は、平成16年度以降は安定した状態であり、<u>河口堰の影響と考えられる変動は認められない。</u>
水 質 (底層DO)	【目的】 河口堰は、通常オーバーフローで管理しており、夏場に温度躍層が形成されると底層の流動が低下しDOが低減するためフラッシュ操作を実施している。 ・平成12年にフラッシュ操作方法を確立し、平成23年から操作開始基準を見直すとともに効果的なゲート操作方法を実施している。 ・平成23年から平成26年のまでの間に、アンダーフローを平均127回/年、オーバーフローを平均9回/年実施している。 ・<u>これまでのところ一定の改善効果が見られる。</u> ・今後、更なる弾力的運用に関するモニタリング部会で評価を頂く。

平成27年度 長良川河口堰定期報告 レビュー(2/2)

項目	これまでの委員会での評価と今回の委員会での評価
底 質	【目的】 河口堰の運用にともない底質が細粒分が増加することが懸念されたためモニタリングを行っている。 • 細粒分が増加した箇所もあったが出水によって細粒分が減少し、その後、経年的に細粒分が増加している傾向は見られない。 • 堰運用前と比較して、一方的に細粒分(粘土・シルト)が増加している傾向は見られない。 • <u>河口堰の影響により経年的に細粒分の増加が継続しているとは認められない。</u>
ア ュ	【目的】 河口堰の運用にともなうアユの遡上と降下への影響について把握するためにモニタリングを実施している。 • 年変動はあるものの、順調に遡上・降下していることが確認された。 • <u>稚アユの遡上及び全長組成に対する河口堰の影響は認められない。</u> • <u>アユの全長組成に対する河口堰の影響は認められない。</u>
ヤマトシジミ	【目的】 河口堰の運用にともなうヤマトシジミの生息に対する影響について把握するためにモニタリングを実施している。 • 堰下流域における確認個体数の変動は大きい、一定の変化傾向は見られない。 • <u>堰下流におけるヤマトシジミの確認状況に変化は見られない。</u>
ヨ シ	【目的】 河口堰の運用にともなうヨシ原の生育状況の変化について把握するためにモニタリングを実施している。 • 治水事業で必要な箇所を除く保全すべきヨシ原の分布状況はほぼ横ばいであり、<u>ヨシ原は概ね維持されている。</u>